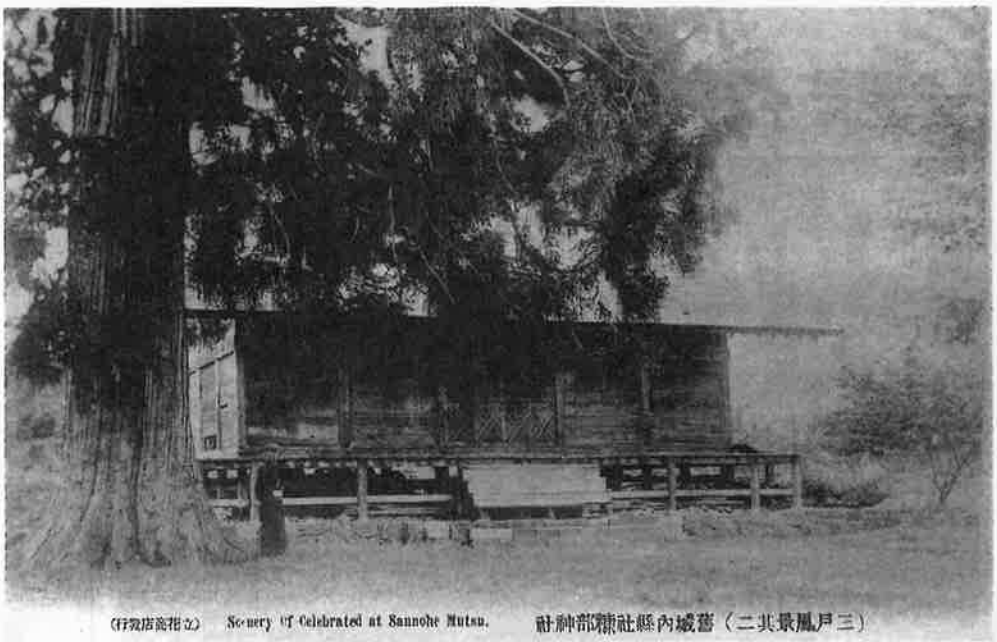

糠部神社（明治末期・青森県史編さん資料）

糠部神社創建と二人の男
～佐藤連之助と北村禮次郎～

相馬　英生
（三戸町教育委員会事務局）

1878（明治11）年12月1日、三戸城跡（三戸町）に糠部神社が創建された。この地は、近世大名盛岡南部氏が盛岡移城前に居城とした由緒正しき城跡で、祭神は同氏が始祖とする南部光行である。創建にあたっては、三戸在住の元藩士、佐藤連之助が主唱者となり、「二戸、三戸、北三郡ノ有志者」の尽力があったとされる（『糠部五郡小史』）。

主唱者の連之助は、豪快な性格で、人並み外れた才能を持ち、全国各地を巡り歩いて、貴重な経験を積み重ねたと評されている（太田弘三「三戸名士列伝」）。

しかし、創建に重要な役割を果たした人物がもう一人いたことは、あまり知られていない。その名を北村禮次郎という。禮次郎は福岡（岩手県二戸市）在住の武士、田中館連司の次男として生まれ、三戸の北村家の養子となった。ちなみに、長男稲造は、世界的に有名な物理学者、田中館愛橘博士の父である。

彼の死後、友人である岩舘武敏が死を悼み、顕彰を目的に記した「水斎北村禮次郎行状」（『二戸市史料叢書　第九集』）において、糠部神社創建をめぐる連之助と禮次郎の興味深い話が紹介されている（ただし「佐藤連之助」は、「工藤練之助」と仮名）。

それによれば、練之助は旧藩主へ三戸に光行を祀る社殿を建設することを願い出るため上京し、許可を得たものの三戸に戻るや、以前から目論んでいた十和田山への社殿建設を言い出したのだった。もっとも、練之助に対する周囲の評価が、あまり芳しくなかったため、誰にも相手にされず、この計画はうやむやになろうとしていた。

そのとき、禮次郎は大いに嘆いてこういったという。

「光行公が初めて入部し、その子孫である南部氏が数百年の長きにわたり在城した地である三戸の者が、光行公を祀ろうとして成功させることができずに放棄してしまえば、練之助ひとりの恥のみならず、三戸人すべての恥辱となる。故に、この計画を練之助から切り離して、三戸城跡に光行を祀る神社を造営すべきだ」と。

そして禮次郎は連之助に相談し、自らこの件を引受け、1875（明治8）年9月、創建へ向けて動き出す。まず社殿建設や神社経営の計画を立て、寄付の募集にも着手した。また神祭願を作成し、願書への署名を得るべく二戸、三戸、五戸、七戸、八戸へ働きかけた結果、各地で惣代が選ばれ願書への署名がなされた。さらに禮次郎は惣代と青森県庁との間を周旋するため奔走した。こうして神祭願が許可されたのは、2年後の2月のことだった。

その後間もなく、禮次郎は岩手県の招きに応じて奉職したため、社殿の建設には関与できなくなっている。岩舘武敏は、三戸の人々が禮次郎の功績を記録に残さなかったことを「薄恩」と指摘し、連之助を悪役として描いているが、当初連之助が唱えた「光行の霊を三戸で祀る」という構想を禮次郎が引継いで、神社の場所を三戸城跡と定め事業を進めたと言えなくもない。連之助と禮次郎、この二人の存在があってこそ、糠部神社創建は果たされたのかもしれない。